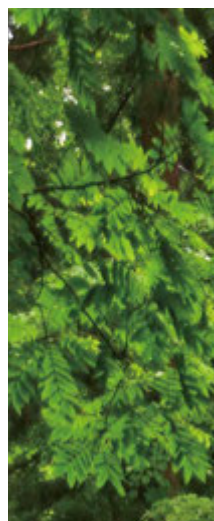
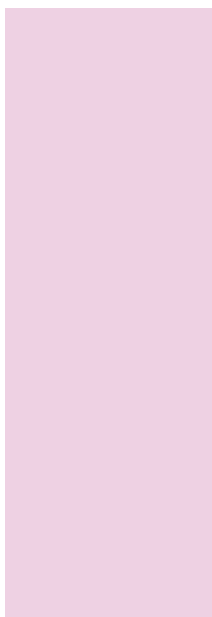


**ACTIVE
LEARNING
REPORT**

2023



巻頭の言

今年度（2023年度）は、3年以上にわたった新型コロナウイルス感染症に伴うさまざまな行動制限がようやく撤廃されました。4月のオリエンテーションでも、マスクを取って話をする先生方の姿が目立ちました。

文化交流学科のアクティブ・ラーニングも、コロナ禍以前の活発な雰囲気もどってきたようです。報告書には、この1年間、文化交流学科の教員と学生たちがさまざまな形で取り組んできた実践的な学びの成果が紹介されています。

ただ、コロナ禍以前の状況に完全に回復したわけではありません。原油価格の高騰による海外航空運賃の値上がり、物価高や円安、人手不足などの要因により、遠隔地への旅行のハードルは確実に上がっています。海外旅行はもとより、国内旅行の費用も高止まりしたままです。文化交流学科の実習科目「文化交流体験」は、今年度鹿児島県の与論島をフィールドとした研修旅行を計画していましたが、費用が高いという理由で参加人数が集まらず、結局不催行となりました。

実は「文化交流体験」は、2018年度を最後に、それ以降ずっと実施されていません。それまでのプログラムでは、アジア、ヨーロッパ、中央アジアと世界各地を訪問し、普通の旅行では体験できないユニークな交流体験を提供してきただけに、今年度も実施できなかったことは非常に残念です。来年度はぜひ復活することを願っています。

もちろん異文化交流は、海外に行かなければできないというものではありません。自分が暮らす地域社会にも、自分が属している文化とは異なる人々のコミュニティが存在し、近年それらはますます多様化していることは、少し注意を向ければすぐに実感することができます。茨城県でも、とくに県南地域の在住外国人人口は上昇の一途をたどっており、ブラジルやハラル食品を扱うスーパー、ガチ中華のレストラン、タイ人の経営する農園、シク教徒の集う寺院など、多様なエスニックスポットが出現しており、移民コミュニティの重要な拠点となっていることがわかります。自分が属しているコミュニティの枠に引きこもらず、ぜひ身近な地域に存在する異文化コミュニティに飛び込んでみてください。みなさんにとって必ずや貴重な「文化交流体験」の機会となるはずです。

報告書の中で活躍する先輩たちの後に続いて、アクティブな学びの場に飛び込んでいく学生がこれからもっと増えていくことを心から願っています。

2024年1月22日
文化交流学科主任
志賀 市子

目次

巻頭のことば（文化交流学科主任 志賀 市子）

I. 大学生が開催した2回の写真展 <博物館実習／文化論演習>	1
II. 1 Day グローバル・カフェ <多文化協働演習>	17
III. 作品紹介 <情報デザイン演習>	27
IV. 学科講演会	31
V. FD 報告書	35

I. 大学生が開催した2回の写真展
＜博物館実習／文化論演習＞

大学生が開催した2回の写真展

<博物館実習／文化論演習>

清水博之

開催の経緯について

文化交流学科では、2023年度に2回の写真展を開催した。7月は「日立鉱山『閉山』40周年記念写真展」、11月は「ユネスコ無形文化遺産『山・鉾・屋台行事』写真展」である。

これらの写真展は、博物館実習と文化論演習をそれぞれ履修する学生たちが参画して開催したものである。

博物館実習は、学芸員資格を取得するための課程において、博物館学に関する専門的な授業（博物館展示論、資料保存論、あるいは博物館教育論など）で得られた知見を総合して実践的かつ体験的に学修する通年にわたる実習授業である。これまでおもに講義形式で受講してきた履修生は、この博物館実習という授業で、まさにアクティブ・ラーニングの手法によって写真展を開催したのである。

一方、文化論演習（ゼミ）においては、従来から地域における文化的資産の掘り起こしと活用をテーマとして現地演習などを実施しながら学修してきた。また、ゼミ生のほとんどが本学の同好会である民俗文化研究会に所属していることも一つの特徴である。

筆者が、「とやまのユネスコ無形文化遺産普及啓発事業協議会（事務局：富山県教育委員会）」において調査指導委員を務めていることから、毎年、希望するゼミ生は調査補助員として祭りの場に連れて行き、聞き書きや観察などの調査に従事してもらっている。そこでの成果は、本学シンポジウムにおける学生発表や報告書などによって公開されている。

今般の写真展では、ゼミの中で対象としてきた地域の文化的資産をあらためて見直す良い機会となった。そして、写真展に来場する方がたへ、学生が自ら実見し体験した祭り・行事の素晴らしさや躍動感を説明することで、地域文化を発信する意義や喜びも得ることができた。

中井川俊洋氏について

今回の2回の写真展では、本学における博物館実習や地域貢献研究などの授業に実務家講師として招いている中井川俊洋氏の全面的なご支援とご協力によって実現することができた。

中井川氏は、茨城キリスト教学園高等学校を卒業後、日本大学芸術学部写真学科に進学し、その後、在京のプロカメラマンとして今日まで活躍している。活動の場所は、国内はもとより堪能な英語会話を生かして世界各地に広がっている。

その中井川氏が故郷の日立鉱山が閉山になることを知り、なんのツテもないところへ一人で取

材に訪れたのは、彼が大学4年生のときであった。

鉱山の人たちは、飛び込みでやってきた一大学生を温かく迎え入れ、鉱山の内外の写真撮影を許してくれた。やがては、鉱山の労働組合から正式に記録写真の撮影を委ねられるようになり、鉱員の生活の様子から坑道内の作業風景まで垣間見ることができるようになった。

一方、その頃の筆者は博物館の学芸員として茨城県北地方の民俗や地理の調査を実施していた。そして、日立鉱山の閉山が話題になった頃に、恩師の岩間英夫先生（元・茨城キリスト教学園高等学校校長）から一緒に日立鉱山の閉山の様子を調査してみないかとお声かけをいただいた。

岩間先生は、常磐炭田をはじめとする炭鉱や鉱山における人々や組織について地理学の分野から研究していたが、調査は現場に出向き直接対象者から聞き取りをする地道で堅実な手法であった。

岩間先生が鉱山の坑道へ入れてもらうために会社へかけあうと、坑内のことであれば労働組合の了解が必要だということになった。そこで、先生とともに労働組合の事務所へ出向き、労働組合の大町委員長に面会させていただいた。そこで快く承諾を得ることができ、坑道をはじめ山中にある山神社や社宅・集会所の跡などを、幾日にもわたりベテランの社員の方々に案内していただくことができた。

このような調査の中で私たちは中井川氏と偶然に出会い、同じ学園の出身ということもあり、交流を深めることになったのである。この日立鉱山「閉山」以後も、ことあるごとに中井川氏には私の調査に同行していただき、数々の貴重な写真を撮影していただいていた。

今回の写真展についても、中井川氏が「閉山」の当時に撮影したモノクロ写真をあらためてデジタル化したことで、これまで肉眼では確認できなかった陰影がより鮮明に写しだされることになった作品をオリジナルプリントで作成していただいた。

ユネスコ無形文化遺産の山・鉾・屋台行事の写真展についても、中井川氏には毎年、調査用の写真撮影のために同行していただいております。その中から秀作を選定してプリントしていただいたものである。この写真展では、富山県内の祭り・行事とともに茨城県北地方の日立風流物や常陸大津の御船祭、そして往年の久慈浜の祭り風景などの写真も展示できたことは、とても意義あることだった。

参画した学生

・日立鉱山「閉山」40周年記念写真展

石井美羽、鈴木一将、藤田さくら、西村拓真、金子愛子、仲谷圭介

石井優希奈、佐川仁美、林和宏

※ このほかに「博物館実習」と「文化論演習Ⅰe/Ⅲe」の履修生が展示作業を支援した。

・ユネスコ無形文化遺産「山・鉾・屋台行事」写真展

鈴木一将、藤田さくら、鈴木茉莉子、西村拓真、金子愛子、小又さくら

大森優太、石井優希奈、佐川仁美

(順不同・敬称略)

趣意書

フォトグラファー 中井川俊洋

日立鉱山「閉山」40周年記念

写真展

1. 趣旨

日立鉱山は、日立市発展の礎であった。明治 38(1905)年に久原房之介が赤沢銅山を村名に因んで日立鉱山と改称し創業したのが始まりである。昭和 4(1929)年には日本鉱業(株)が設立され、その主力鉱山となった。一方では、大正 9(1920)年には修理部門から(株)日立製作所が独立して、市内にはいくつもの大工場が建設されることになった。

日立鉱山は、昭和 56(1981)年に 76 年間にわたる採掘を終えて閉山した。この閉山から 40 余年を経た現在、日立市では日立製作所の工場群は他の企業へ運営が移り、中心市街地は失われて街の活気も消えてしまった。

ここであらためて近代日立市の原点ともいえる日立鉱山の閉山をフォトグラファーの中井川俊洋氏が撮影した写真によって顧みて、そこで働いていた人たちの姿を思い起こしたい。このささやかな写真展が、次代を担う人たちに少しでも街づくりの勇気を与えることができれば幸いである。

2. 期間 令和5(2023)年7月4日(火)から7日(金)まで (4日間)

3. 時間 午前10時から午後4時まで

4. 会場 学校法人 茨城キリスト教学園 学園記念館

所在地:茨城県日立市大みか町6-11-1(JR大甕駅西口から徒歩1分)

5. 内容 フォトグラファーの中井川俊洋氏(本学園高校・日本大学芸術学部卒)が、日立鉱山閉山の前後から今日までに撮影した写真作品の中から約30点を展示します。

6. 観覧料 無料でご覧いただけます。

7. 対象者 本学学生・教職員、一般市民の方

8. 主催 茨城キリスト教大学文学部文化交流学科、民俗文化研究会(本学同好会)

9. 一般の方の見学手順

(1) 茨城キリスト教大学の正門(大甕駅西口)をご利用ください。

(2) 正門の守衛所で「写真展見学」とお申し出ください。

(3) 会場の学園記念館は、正門から直進し、200メートル先の左側にあります。

10. その他 学内には観覧者用の駐車場はありません。公共交通機関をご利用ください。
自動車でお越しの場合は、近隣の有料駐車場をご利用ください。

11. 担当 茨城キリスト教大学文学部文化交流学科 教員 清水博之

※ この写真展の企画や運営などは、本学の学生が教職員とともに実施するものです。

日立鉱山「閉山」40周年記念写真展

展示作品の一部



写真1 入坑(1981.09.17)



写真2 取り壊し(1982.4.15)



写真3 アパート前の少女(1981.09)



写真4 運び出された鉱車(1981.11)

日立鉱山「閉山」40周年記念写真展

会場の様子



写真 5 学生による展示作業(7/3)



写真 6 写真展の会場(学園記念館)(7/7)



写真 7 一般来場者の観覧(7/6)



写真 8 元社員の方の観覧(7/6)



写真 9 展示の解説を受ける学生(7/7)



写真 10 中井川俊洋氏と清水博之(7/5)

日立鉱山「閉山」40周年記念写真展

アンケート回答(抜粋)

7月4日(火)

- ・日立鉱山を取り上げていただき、とてもうれしく感激しました。(60代、日立市、鉱山関係者)
- ・当時住んでおりましたので、とても懐かし涙が出ました。(60代、日立市、鉱山関係者)
- ・日立市で育ったので懐かしかったです。(60代、常陸太田市、一般)

7月5日(水)

- ・私は1970年代生まれです。生まれた当時の日立の様子、こんな姿もあったのだとあらためて感じました。古き良き時代だったのだと感じました。(40代、ひたちなか市、同窓会関係)
- ・どの写真もまず素晴らしいと思いました。残っていることも残してくださった方も。私自身は生まれ間もない頃の時代ですのでわからないことが多いですが写真から懐かしさを感じました。(40代、日立市、一般)
- ・以前見た写真があれば新たに見たものもあり当時の状況がよくわかった。定期的に公開してほしい。新たに見つかる写真もあると思う。(60代、ひたちなか市、一般)
- ・懐かしく拝見致しました。先人が最後の日を迎えてどんな思いだったのでしょうか。今は無き賑やかだった鉱山が思い出されます。(70代、日立市、一般)
- ・当時の現場の情景を懐かしく思い出す。(80代、日立市、一般)
- ・山の男としての気概が感じられました。小学生のとき一度見学をした覚えがあり、今もたまに現地足を運んで当時に思いを馳せています。(70代、常陸太田市、一般)
- ・今では決して見るできない日立鉱山の様子やそこで活躍していた人々の姿を見ることができ、歴史の重みと人の熱さを感じられる展示であると思った。(20代、常陸太田市、学生)
- ・昔、知人が鉱山で働いていました。懐かしかったです。(70代、日立市、一般)
- ・ここで働いていた方々が日本の産業発展に大きく貢献されたことに対して敬意を表したい。貴重な写真を展示いただきありがとうございました。(70代、日立市、一般)
- ・私の父親が日立鉱山で働いていました。懐かしく昔を思い出しました。(80代、日立市、鉱山関係者)
- ・日本の大切な歴史を感じました。モノクロ写真の素晴らしさをあらためて知りました。たくさんの方に見て知ってほしいと思いました。(60代、東京、一般)
- ・かつて栄えていた町・地域が段々と寂れていく様子がひしひしと感じられました。人の表情や建物からも哀愁がにじみ出ている、もの悲しさと同時に住民の人々がどのような思いで働き生きていたか考えさせられました。(20代、笠間市、学生)

7月6日(木)

- ・私の父も十王町にあった炭鉱で働いておりました。写真を拝見しこんな風に働いていたんだなあと思ひ知ることができました。来て良かったと思ひました。(70代、高萩市、一般)
- ・日立鉱山の閉山時の写真がとてもリアルで人々の表情に心打たれました。歴史の貴重な一コマから大切なものを感じ取ることができ、ここに來られて良かったと思ひます。(60代、日立市、一般)
- ・40年前の記憶が薄らいているが素晴らしい写真展です。県外から日立へ來て初めて鉱山を知りました。(80代、日立市、一般)
- ・日立の大きな歴史の記録を丁寧に撮り続け、このような写真展を開催されたことに感銘を受けました。これからも紹介を続けて下さいますように。(70代、水戸市、卒業生・元職員)
- ・閉山時の人々の心の模様が感じ取れた。(30代、日立市、アンネローゼ講座参加者)
- ・日立駅から電車に乗って日立製作所山手工場前で下車して通勤していたので、余計親しみを感じた。(80代、日立市、一般)
- ・子供の頃から鉱山電車に乗っていたので、とても懐かしい。働く人たちのそれぞれの表情が良く撮られている。(70代、日立市、元教員)
- ・昔住んでいたので思ひ出しました。父が日立鉱山に勤務しており20年ぐらゐ住んでいたところでした。(60代、常陸太田市、一般)

7月7日(金)

- ・会場で見ている方に声を掛けたらいろいろ話が出て本山の生活を思ひ出しました。(80代、日立市、鉱山関係者)
- ・閉山後のリアルな写真を見てより親近感を味わえた。このような機会をいただきありがとうございます。(30代、常陸太田市、本学職員)
- ・私は1989年生まれですが、生まれる8年前まで鉱山があつて実際に作業がなされていたという事実に感銘を受けました。「日立鉱山」という言葉は知っていましたが、鉱山の実際の写真やそこで働いていた方々のリアルを観ることができ、日立の歴史に想いを馳せることができました。ありがとうございました。(30代、日立市、本学職員)
- ・嬉しく思ひナミダが止まりません。(70代、日立市、鉱山関係者)
- ・日立鉱山について前から興味はあつたが、このようなかたちで鉱山のリアルな現状や人々の様子を見ることができてとても興味深かつた。(10代、日立市、学生)
- ・日立鉱山の歴史を強く感じました。貴重な写真だと思ひます。ありがとうございました。(60代、水戸市、本学教職員)
- ・生々しい姿が見られ当時の大変さがよくわかりました。(60代、日立市、会社員)
- ・高校生まで本山に住んでいたのが懐かしく拝見しました。坑内の様子など見たことが無かつたので写真で初めて見ました。(70代、日立市)
- ・子供の頃、諏訪鉱山に居住していたことがあり、とても懐かしく拝見しました。(70代、日立市)

- ・父からよく日立鉱山の話を知っていたので、今回の写真や講話を聴いて理解を深められた。(20代、日立市、学生)
- ・自分たちの知らないところで、こんなにも命の危険と隣り合わせで地域の発展に務めた人がいたんだと感動した。(10代、ひたちなか市、学生)
- ・写真からしか得られない発見があった。一覧表には女性の名前もあって、一体となって仕事を支えていたことが読み取れた。(10代、水戸市、学生)
- ・日立鉱山の名前すら聞いたこともなかったのですが、閉山のときの人々の写真を見て、そこで働いていた人たちの生活が垣間見えて良い経験になりました。(10代、かすみがうら市、学生)
- ・日立鉱山についての話は聞いたことがあったけれど、人々がどのように鉱山で生きて来たのか、またその暮らし方について具体的に知らなかったのが、今回見ることができて良かった。再就職先を探したり、閉山で引っ越すときの表情が印象に残った。(20代、常陸大宮市、学生)
- ・最後の発破や労組の解散式の写真から、もの悲しさを感じた。この写真展を見るまでは手掘りをイメージしていたが、文明的な進化をしていたことを感じる事ができた。(20代、北茨城市、学生)
- ・この写真展の展示作業をして、授業内でも観覧することができて日立鉱山について詳しく知ることができた。日立鉱山の跡地に行ってみたいと思った。(20代、那珂市、学生)
- ・日立市民でありながら私は日立鉱山のことを何も知らなかったということに気づかされた。展示されている写真はどれも生き生きとして素晴らしかった。(10代、日立市、学生)
- ・最近までこのように危険と隣り合わせの仕事が行われていたことに驚きました。自分には知らないことばかりだったので、知ることができて良かったです。(20代、茨城町、学生)
- ・先生に解説してもらいながら見学しました。地理的には身近でありつつ、詳しい知識を持っていない日立鉱山についての知識を深められて良かったです。写真はやはり文字にない種類の臨場感があって生活の雰囲気や当時の人々の価値観の雰囲気まで伝わってくるように感じられました。鉱山内部だけでなく、閉山時の人々の生活や営みなどの部分まで見られたもの良かったです。現在の写真もその後の生活があった(ある)ことをあらためて感じられました。また、配置も見やすかったです。(20代、水戸市、学生)

趣意書

フォトグラファー 中井川俊洋

ユネスコ無形文化遺産「山・鉾・屋台行事」

写真展

1. 趣旨

本学が所在している日立市において約 300 年間にわたり継承されてきた日立風流物は、我が国の山・鉾・屋台として初めて国の重要民俗文化財と重要無形民俗文化財に指定された。あわせて 2009 年には、同じく山・鉾・屋台として初めてユネスコ無形文化遺産に登録された。その後、2016 年には、全国 33 か所の山・鉾・屋台行事をグループ化することにより、あらためて一括してユネスコ無形文化遺産「山・鉾・屋台行事」として登録されている。

本学では、このユネスコ無形文化遺産「山・鉾・屋台行事」について、2012 年度のシンポジウム開催以来、地域文化の再発見や地域貢献の一環としてさまざまな事業を展開している。

とくに 2022 年度からは、文化庁の補助を受けて、富山県下の3市（高岡市、南砺市、魚津市）において、ユネスコ無形文化遺産に登録されている山・鉾・屋台行事の調査事業を推進しているところである。この調査事業では、本学の同好会である民俗文化研究会の会員が補助調査員として参加しており、これまでも本学シンポジウムや報告書などにおいてその成果を発表してきた。

一般の写真展は、この富山県における調査事業に記録写真担当として参加しているフォトグラファーの中井川俊洋氏が撮影した作品を展示するものである。同氏は、これまでもユネスコ無形文化遺産である日立風流物や秩父夜祭などの写真撮影も数多く手掛けている。

この写真展を、一般のかたがたも来観できるシオン祭の時期に開催することにより、広く地域の伝統文化への理解を促すとともに、本学における地域貢献活動の一端を知っていただく機会とする。

なお、写真展の企画・運営には、本学の「博物館実習」と「文化論演習」を履修している学生が参画した。

2. 期間 令和 5 (2023) 年 11 月 2 日 (木) から 3 日 (金・祝) まで (2 日間)
3. 時間 午前 10 時から午後 4 時まで
4. 会場 本学 1 号館 5 階の多目的エリア (MPA) 及びグローバル・エクステンジ・エリア (GEA)
5. 主催 茨城キリスト教大学 文学部 文化交流学科
6. 共催 茨城キリスト教大学 同好会 民俗文化研究会
7. 企画・運営 「博物館実習」及び「文化論演習Ⅱe/Ⅳe」の履修生
鈴木一将、金子愛子、鈴木菜子、佐川仁美、石井優希奈、
藤田さくら、西村拓真、小又さくら (順不同)
8. 協力・支援 地域・国際交流センター、学務部、大学図書館、用務員の皆さま
9. 担当 文化交流学科教員／民俗文化研究会顧問 清水博之

ユネスコ無形文化遺産「山・鉦・屋台行事」写真展

展示作品の一部



写真 11 高岡御車山祭り



写真 12 城端曳山祭り



写真 13 魚津タテモン行事



写真 14 日立風流物



写真 15 常陸大津の御船祭



写真 16 久慈浜の祭り

ユネスコ無形文化遺産「山・鉾・屋台行事」写真展

会場の様子



写真 17 台紙へ写真を貼り付け



写真 18 照明機器の設置



写真 19 作品の位置決め



写真 20 作品の飾り付け



写真 21 展示作業後の記念写真



写真 22 展示会場の受け付け

ユネスコ無形文化遺産「山・鉦・屋台行事」写真展

アンケート回答(抜粋)

11月2日(木)

・高岡市を訪れたことがあります、(この写真展で)ユネスコ無形文化遺産があることを(初めて)知りました。展示することによってどんどんいろいろな方に知らせて行ければ良いと思いました。(60代、日立市、本学学生の家族)

・ユネスコ無形文化遺産である「山・鉦・屋台行事」を舞台に写真が展示されていましたが、祭りが開催されている写真だけでなく、それに至るまでの設置や組み立てなどの準備期間の写真があることで、自分が実際にその場所にいるような躍動感を感じることができました。また、人々の表情によく着目して撮影していると思いました。特に印象に残った写真は(城端曳山祭りの)「唐子山(出丸町)」宵祭の山宿で飾られる御神像(布袋)です。「千と千尋の神隠し」の油屋のようなアニメの世界観のある写真だと思いました。(魚津市の)「タテモンと花火」の写真を見て実際に行ってみたくなりました。(20代、水戸市、他大学の学生)

・どの写真もお祭りの風情が感じられて味わいがありました。なかにはかなり古い写真もあり歴史の深さを感じることができました。こういった文化が各地に残っているのが素晴らしいと思います。(水戸市、本学学生)

・全国のお祭りを知る良い機会になりました。清水先生の説明もあり楽しめました。写真のみでは伝わらない現地の匂いや音を感じることができました。(30代、常陸太田市、本学教職員)

・各地域の伝統ある祭り、その様子が写真の中で生き生きと表わされており、見ていて心湧くものがありました。ありがとうございました。(30代、水戸市、本学教職員)

・一所懸命に制作して時間を掛けて祭りの為に…という精神が素晴らしい。学校の文化祭はゆるい感じで良いと思うが、本気で取り組まれている催し物には何か感動するとか、言葉にはできないはっとさせられるものを心の底から感じるができる。私はそういった伝統的なお祭りを見るとワクワクする。楽しみを入れる、例えば大洗のあんこう祭りではガルパンが盛り上げるなど、工夫を入れると若者が楽しく文化に触れることができ世代間交流もつながるので良いと思う(個人的な対策)。(10代、水戸市、本学学生)

11月3日(金)

・自分は日立市出身なので小学校時に習った内容のような写真に加えてどのようにユネスコの遺産を遺しているのか写真越しに伝わってきた。(20代、日立市、本学学生)

・昔の写真も展示してありおもしろかった。写真がとてもきれい。大きな写真はとても迫力があつた。(50代、小美玉市、その他)

・おもしろかった。花火の写真がよかった。(10代、ひたちなか市、その他)

- ・久慈浜の祭りなど、以前の様子が伝わるお写真を拝見して懐かしく感じました。(60代、日立市、その他)
- ・富山に古くから伝わる祭りに初めて触れることができ、とても興味深く拝見しました。(40代、ひたちなか市、本学教職員の家族)
- ・祭りの中のなにげない表情や風景が良く写されていました。(60代、つくば市、本学学生の家族)
- ・魅力的な写真が多く、見ていてとても楽しかったです。(10代、日立市、その他)
- ・文化遺産について知ることができた。地元の和を感じることもできた。(10代、日立市)
- ・富山の良い所が写真の中から垣間見えた。(40代、ひたちなか市、本学学生の家族)
- ・華やかでキレイ! 日本の祭り…大好きです。(60代、日立市、卒業生)
- ・「夕景を背にするタテモン」の構図がとても美しいと感じました。(20代、那珂市、卒業生)
- ・構図など撮り方にこだわりを感じて、どれもお祭りの雰囲気が感じ取れてよかった。(20代、東海村、卒業生)
- ・大学の授業でたくさんの祭りに行って、写真を見れて楽しかった。(10代、日立市、本学学生)
- ・壮大な山車の写真が迫力ありました。少子化や地方の過疎化が進んでおり、若い人に興味を持ってもらうことは大事だと思います。(50代、山梨県、本学学生の家族)
- ・様々な場所が明るく写っているのが良かった。(20代、水戸市)
- ・日立市であんな立派なお祭りがあることを初めて知った。写真も素晴らしい。ほかのお祭りもすごいです。(50代、水戸市、本学学生)
- ・美しい写真で、見ていてあきませんでした。(30代、日立市、その他)
- ・現代的な文明に囲まれた環境に居ると忘れてしまいそうな遺産を残すことは大切にしようと思えました。(20代、日立市、卒業生)
- ・地元のお祭りを初めて知ることができました。(20代、水戸市、本学学生の家族)
- ・伝統文化を知ることができました。(50代、日立市、本学学生の家族)
- ・日立風流物の写真も多く見てみたい。(50代、卒業生)

参加した学生のコメント

今回の写真展で展示作業というものを初めて経験したので、どれも新鮮で楽しむことが出来ました。展示作品も少なかったのに加え、展示スペースも狭かったので、そんなに大変ではないだろうと思っていたのですが、実際に展示作業を行ってみると、10人以上で行っても90分で終わらず、展示物間を等間隔にすることや、高さを揃えることがとても難しいと感じました。

実際の博物館や美術館では、展示室の数百、千倍の広さであるし、展示物の大きさも多種多様であり、数も比べ物にならないほどあるので、一つの展示を作り上げることの大変さを知ることが出来ました。

また、展示作業と受付業務だけしか行わなかったが、本当であれば、展示場所の確保、展示スペースをどのように使うか、展示物はどうするか、来場者に何を感じてほしいか、パンフレット作り等、多くのことを行う必要があるので、展示会の開催期間以上の多くの時間をかけて作り上げなければならぬということが分かりました。

実際に、展示会作りというものを経験してみて、博物館や美術館に行った際に、展示物の並べ方やこの展示を通して何を一番に伝えたいのかなど、今まではなかった視点で、展示を見ることが出来るようになりました。

学園祭での写真展では、学園祭ということもあり、いろいろな年代の人たちが展覧会にきました。少しですが写真展開催に携わってみて、見る側は一日で終わってしまう展示でも、学芸員は本当に長い期間一つの展示に関わり、一つの展示を作り上げているのだということが分かりました。

(文化交流学科4年 藤田さくら)

2回の写真展の展示にかかわり感じたことは、展示作業をする際に意外と人手が必要になるということです。最初は少人数でも、すぐに終わると思っていました。

しかし、実際に作業をしてみると、展示物が傾いていないかどうか確認してもらったり、展示物同士の間隔は間違っていないかなどを見てもらったりするなど、一人ではできない作業も多くあったのです。展示をするには意外と力仕事であるということを実感しました。

また、展示作業をする際、周りの人とコミュニケーションをとりながら作業をする必要があるため、自然と仲が深まる良い機会となりました。

受付では、来客の人数のカウントや、展示場所に誘導するということをしました。客の年齢層は、学生からお年寄りまで様々な人が訪れます。そしてお帰りになる際、どの方も笑顔で帰っていただけだったので、自分たちが苦勞して展示した甲斐があり、良い思い出となりました。

(文化交流学科4年 鈴木一将)

今回、2つの写真展に関わる事ができ、普段では中々体験できない充実した時間を過ごせ、本当に嬉しく思います。

受付作業において、特に日立鉱山の写真展では、学園の内外から多くのお客様がご来場してくださいました。どのお客様もじっくりと写真を眺め、当時の日立鉱山に思いを馳せつつ昔話に花を咲かせていた方々もいらっしや、その様子を見ると、改めてこの写真展の制作に携われて良かったと思いました。

また、シオン祭での展示作業では、お祭りの写真を飾り付けする中で、メンバーと写真を見ながらお祭りの感想を交換しつつ、協力して作業に取り組みまして楽しかったです。そして、完成した会場を見た際は大きな達成感がありました。

(文化交流学科3年 石井優希奈)

私は7月4日から7月7日まで開催された「日立鉱山「閉山」40周年記念写真展」のみ参加させていただきました。

来場者の方々に「来てよかった」と思っていたくためには何が必要かを考え、会場の設置および受付を行いました。

これまでの「展覧会を見る側」では得られなかった視点を得ることができ、貴重な経験ができたと感じております。ありがとうございました。

(文化交流学科4年 石井美羽)

おわりに

今年度開催した2回の写真展は、筆者にとって本学で初めての試みであった。博物館や美術館であれば当然のようにあるべきのり付きパネルや大判のカッターシート、展示台などの機材がない中で、右往左往しながら準備を進めた。しかし、学園ならびに大学の担当課所と教職員の皆様には多大なるご支援とご協力を賜ることができた。用務員の皆様には展示パネルの運搬や設置の作業をしていただいた。管財課と学園キリスト教センターには学園記念館を展示会場として使うことを快くご承諾賜った。地域・国際交流センターにも1号館5階のMPA、GEAの会場使用についてご協力をいただいた。入試広報部には本学ホームページをはじめとする広報活動のご支援をいただいた。学務部にはシオン祭への参加や労務関係の調整などのご助力をいただいた。大学図書館には、展示用の機材を借用した。警備や総合案内のご担当者様にも、一般の方への対応でご助力をいただいた。このように考えると学園全体で作り上げた写真展だったのではないかと感じている。来館者の方がたが写真を観覧しながら談笑したり涙を流していたりする光景を見て、学生の皆様が少しでも達成感を味わうことができたならば、十分に目的は果たせたと言えるだろう。

Ⅱ. 1 Day グローバル・カフェ ＜多文化協働演習＞

I Day グローバル・カフェ

<多文化協働演習>

勝山紘子・藤野真拳

今年度、本演習では2023シオン祭(11月4日)にて「I Day グローバル・カフェ」を開催することを目的に、留学生と日本人の学生でチームを組み、ウクライナ、イタリア、インドネシア、ベトナムの文化紹介と物品販売を行った。本授業の目的は、学生および留学生が、さまざまな国の文化について知見を広め、多文化理解を深めることである。協働作業を通して、学生と留学生にとって多文化共生社会におけた主体的な行動につながる学習機会になることを目指した。シラバスに掲載した内容は以下の通りである。

- ①グローバル・カフェ(一日限定イベント)を企画、開催する。
 - ・留学生と日本人学生でグループを作る
 - ・その留学生の母国の文化から、テーマと内容を決める。
 - ・国の紹介、〇〇語ではなそう、民族衣装を着てみよう、各国のお茶体験、料理紹介、音楽、ゲーム、〇〇国検定、フリートークなど。

当日は、プログラムを配布し、配布枚数により人数確認を行なった。シオン祭への来場者数が多かったため、およそ500名の方に来ていただくことができた。想定を超える人数であったため、準備していた物品の個数が足りず、午前中で売り切れる班もあったが、思わぬ盛況ぶりに学生たちもやりがいを感じたようであった。以下にそれぞれの班の活動内容と感想コメントの抜粋を記す。

【ウクライナ班】

<内容>ウクライナの文化紹介。ウクライナ語のメッセージカードやウクライナのイメージカラーのアクセサリを作って、来場者に持って帰ってもらえるようにした。

(Mさん 1年)準備と運営をする中で発見した面白さは、グローバル・カフェを実施することに国籍は関係ないということである。一方で難しかったことは本来ならば物品販売をしたかったのだが、思いのほかウクライナの商



品が品薄で入手が困難だったことである。しかしチームの皆と相談し、ウクライナの観光地や名物を紹介するための原稿を作成したり、来てくれたお客様へウクライナカラーのブレスレットやメッセージカードを作成し、プレゼントすることができて喜んで下さって嬉しかった。

(H さん 1年) 準備に取り掛かってから実際に当日に行う細かい作業事項まで決定するのが遅くなってしまい、飾りつけや来場者に体験してもらう遊びの内容も最終的に決まるのがぎりぎりだった。これらからグループ内での役割分担をし、それぞれが協力することの大切さを学ぶことができた。さらに、私たちのウクライナ班はお菓子などの販売がなかったため、それ以外でウクライナの良さを来場者にアピールできるよう、人気の観光地や写真スポット、料理などの写真をブースの前方に配置することで来場者の方を視覚的に引き付けることができた。

【イタリア班】

〈内容〉イタリアの紹介と、イタリア語体験。イタリア語で簡単な自己紹介ができるように工夫し、持ち帰りの資料を作成した。また、イタリアのお菓子として、ミニウエハースを袋詰めし、販売した。



(O さん 1年) グローバル・カフェの準備期間では、班のみんなと協力してお客様に喜んでもらうためにはどのような工夫や発表をすればいいかをたくさん話し合い、ただイタリアのことを話すだけでは難しいので、クイズ形式にしてお客様にも参加していただいで楽しく学べるように工夫しました。また、パッと見たときにイタリア班だとすぐわかるように飾り付けにもこだわりました。画用紙を使って小さいイタリア国旗を作ったり、モールでテーブルを華やかにしたりして細かい作業まで丁寧に行いました。

(留学生 M さん)達成できた点が多かった。チームメンバーとして、互いにサポートするという最も重要なことが完全にできた。さらに、開始時刻からわずか二時間が経過して、全てのウエハース、つまりイタリア班の物品をすでに売り切ることができ、計画通りにイベントのエリアを装飾し、あらかじめ決定した役割分担によるとチームの各メンバーが役割を果たした。お客さんと他のチームメンバーに自分の国について教えたり、どの物品をどれだけの量で販売するかを決めたり、飾りを手作りしたりすることが面白かった。(…)今回の活動を通して、日本語で自国の文化を「分かりやすく」紹介することの難しさを学んだ。再度イタリアを他の人に紹介する機会があれば、この経験を活かし、人との交流を図りたい。

【インドネシア班】

〈内容〉インドネシアの基本的な情報と文化の紹介。動植物や記念日などについても写真を使いながら紹介した。また、インドネシアのインスタントラーメンを販売した。

(留学生 F さん)私たちは、インドネシア、インドネシアの動植物、インドネシア独立記念日に関する一般的な情報について話し合うことにしました。インドネシアに関する一般的な情報には、インドネシアの地図、通貨、人口、島の数などが含まれます。動物相では、コモドオオトカゲ、極楽鳥、オランウータンについて話し合いました。植物については、死体の花 (ラフレシア アーノルディ)、ピッチャーの花、マトアの果実について説明しました。そして最後に、インドネシアの独立記念日がどのように祝われるかについて話し合いました。インドネシアでは、独立記念日をさまざまな伝統的な競技会が同時に開催されて祝われます。文化紹介では、ご来場いただいたお客様からたくさんの質問やお褒めの言葉をいただきました。多くの人に楽しんでもらい、興味を持ってもらえたら嬉しいです。「インドネシアに行ったことがある」「インドネシアに興味がある」というゲストもいらっやって、とても嬉しかったです。

(T さん 2年)まず初めに、準備と運営のなかで達成できた点は物品をすべて売ることができたこととスライド資料にプラスαの情報をお客さんに伝えることができた点だ。理由は、グループ内で分業して効率化、協働作業できたからである。準備では、案を出す人とスライドを作る人、物品を袋詰めする人と分担して授業内の限られた時間内で行った。当日の運営では、物品販売する人とインドネシアの紹介をする人、呼び込みをする人に分担していた。その中でも、忙しそうなどころでは手が空いた人が助けに行くなど協力して行えた。また、スライドにない関連情報を聞かれた際にも留学生は、自分の経験に基づいて説明していて留学生と一緒にチームだからこそできたことだと感じた。

【ベトナム班】

〈内容〉ベトナムの物品販売と動画をつかった料理のレシピ(バインミーとフォー)の紹介。来場者が自宅でも作れるように配布用レシピを準備した。また、C 科教員の提供物品が複数あったため、ベトナムの物品販売は数も種類も多く、来場者の関心を惹いていた。

バインミーの作り方

【分量 ハーフサイズのバゲット 2 個分】

- ・豚肉(ロース、フィレ肉など) 250g
- ・ニンニク 1 片
- ・五香粉 小さじ 1/2
- ・ニョクナム(ナンブラー、魚醤) 大さじ 1
- ・醤油 大さじ 1/2
- ・はちみつ 大さじ 1
- ・人参の千切り 60g
- ・大根の千切り 60g
- ・砂糖 大さじ 1
- ・ニョクナム 大さじ 1
- ・酢 大さじ 1
- ・バター 15g
- ・鶏のレバーパテ 30g
- ・きゅうりの薄切り 70g
- ・マヨネーズ 少々
- ・生唐辛子 少々
- ・パクチー(コリアンダー)適量



【作り方】

1. 片分のニンニクのすりおろし、五香粉小さじ 1/2、ニョクナム大さじ 1、醤油大さじ 1/2、はちみつ大さじ 1 を混ぜ合わせて、軽く塩コショウした豚肉 250g を漬け込みます。
2. 人参の千切り 60g と大根の千切り 60g を砂糖大さじ 1、ニョクナム大さじ 1、酢大さじ 1 で味付けをします。
3. 豚肉をフライパンで焼きます。焦げやすいので弱火～中火で焼いてください。
4. ハーフサイズのバゲット(フランスパン)を開いてバター、鶏のレバーパテを塗り、きゅうりの薄切り、マヨネーズ、スライスした豚肉、紅白なます、生唐辛子、パクチーを挟んで出来上がりです。

(T さん 3年) 私達のグループは、グローバル・カフェでベトナムの料理について紹介した。準備の中では、パワーポイントにベトナムで有名なフォーとバインミーについてまとめ、作り方のレシピを作成した。加えて、物品販売では値段付けや包装作業を行った。料理の紹介では、レシピ作りを担当し、分かりやすく手順や分量を書き、写真を載せることで完成品をイメージしやすいように工夫した。

(留学生 H さん) 毎回は日本人学生と一緒に相談して、チームワークするチャンスがあるおかげで、日本人がどうやってイベントを進むか知識を身につけた。それは将来、日本で働くのに役に立つと思う。グローバル・カフェを通して、日本人学生を始め、お客さんにベトナムのことについて紹介したり、ベトナムの印象を与えたりできるのが面白かった。

(留学生 Q さん)グローバル・カフェ当日、あまり期待していなかったのに色々なお客様が訪ねてくれて本当に嬉しいと思った。お客様も私たちのプレゼンテーションをととても真面目に聞いてくれて、ありがたいと思った。これから、ベトナムへ旅行したいと言ったお客様もいて、本当に感動した。皆さんと一緒に賑やかな雰囲気を作って、まるでベトナムにいるようだった。

【広報班】

〈内容〉

広報班としてポスターやチラシの作成や立て看板の作成を行った。ベトナム班同様、教員から物品提供のあった様々な国の物品の販売も行った。他の班より人数が少ないにもかかわらず作業量が多かったため、授業外に作業することが多かった。



(S さん 2年)11月3日のグローバル・カフェでは、今までに経験したことのない達成感や運営側の面白さを実感することができた。まず、グローバル・カフェの準備と運営のなかで達成できた点について、一番に達成できたと感じるのは、広報班の売上が15,000円に達したことである。私たちの班が担当した物品は、国元不明のものも多くあり、これらの物品をいくらの値段で設定するのか、どの商品を基準に値段の相場を決めるのかを、メンバー内で話し合った。これが結果として15,000円という売上につながったのだが、当初、値段を決めた際には、こんなにも多くの物品が売れることは全く予想しておらず、売上額を知った時の達成感はとても大きなものであった。

(Mさん 2年)グローバル・カフェの広報班を通して、私は協働と創造力を培うことができた。主にグローバル・カフェ全体を紹介するチラシづくりや立て看板の制作、各国の小物の販売を行った。最も苦労したのは立て看板の制作である。立て看板は企画の雰囲気が最も伝わるものと言っても過言ではない。私たちは第一に立て看板を目に入れてもらうことが大事だと考え、看板の『インパクト』を優先してデザインを提案しあった。各国の料理、国旗、文化財を中心に描く案が出たが、最終的にはベトナムの水上人形劇に登場する『鈴を鳴らす人』をメインに描くデザインに決定した。ベトナムの水上人形劇はベトナム語で「ロイ・ヌオック」と呼ばれ 1000 年以上の歴史をもつ伝統芸能である。伝統楽器の楽団による生演奏とともに物語が展開しカラフルに色塗られた人形たちが水上を縦横無尽に動き、また水上人形の動かし方は劇団の門外秘出で長い間秘密を守るために、昔は劇団に入団するには厳しい制限があった。このような伝統芸能の主要人形をモチーフにした立看板はとてもインパクトのあるものになった。

【準備の様子】



【当日の様子】



【当日配布のプログラム】

本日のプログラム

「多文化協働演習」のクラスで準備した多文化カフェです。
楽しんでください。

★お好きな国のプログラムをお選びください。

- ☆Пряцький (ウクライナ) ウクライナ語でかるた遊び♪
- ☆Benvenuti in Italia (イタリア) イタリア語で話そう！
- ☆Bánh mì (ベトナム) ベトナム料理の作り方♪
- ☆Cendrawasih (インドネシア) インドネシアを知ろう！

★物品販売もあります。留学生たちともたくさんおしゃべりしてください♪

【配布用チラシ】(広報班作成)



～企画紹介～

Пряцкой (ウクライナ) ウクライナ語でかるた遊び♪
Benvenuti in Italia (イタリア) イタリア語で話そう
Bánh mì (ベトナム) ベトナム料理の作り方♪
Cendrawasih (インドネシア) インドネシアを知ろう
各国の文化を留学生と一緒に楽しく学べます!
各国のお菓子や、ベトナムやインドネシア、カンボジアなどから
直接仕入れてきた雑貨も販売します!



【掲示用チラシ】(広報班作成)



Ⅲ. 作品紹介
＜情報デザイン演習＞

作品紹介

<情報デザイン演習>

鈴木晋介

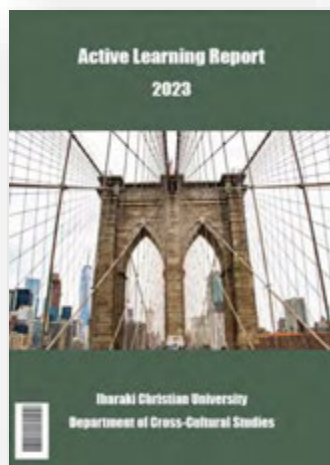
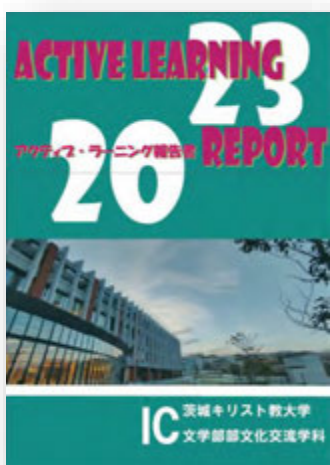
情報デザイン演習では Adobe の編集ソフト InDesign を用いたさまざまな作品づくりに取り組んでいる。今年度取り組んだのは「フリーアート」、「名刺づくり」、「雑誌見開き記事をつくろう」、「アクティブ・ラーニング報告書の表紙づくり」である。本報告書の表紙も学生が演習でつくったデザインであり、学生たちの人気投票で1位に選出された作品が採用されている。

演習の受講者は学科広報誌「ロンゴロンゴ」の編集作業や学科チラシの作成など、習得した技術を毎年さまざまな場面で活かしている。本演習のアクティブ・ラーニングたる所以である。また、ここ数年は単位取得済の学生がスチューデント・アシスタント(SA)として授業サポートに入る形をとるようになったが、これが新規受講者の技術習得速度の向上に大きな効果を発揮している。作品の講評会でも SA の上手なコメントに触発されて受講者たちが和気あいあいと互いの作品を論じる風景が板についてきた。そういえば、今年度は新たな試みを追加した。演習時に各自が作品づくりに取り組む時間があるのだが、作業用のBGMを導入したのである。最初はどこかの喫茶店みたいで笑ってしまったのだが、自然に心地よくなじむようになった。BGM 付きの授業は本学でもこの演習だけかもしれない。

では、2023 年度の実験者の作品を紹介しよう。いずれもこの演習で初めて InDesign を操作した学生たちである。新しいものを吸収し、新たなものを創り出す学生たちのバイタリティにはいつも驚かされている。

<学生たちの作品>





IV. 文化交流学科講演会報告

2023 年度文化交流学科講演会報告

鈴木晋介

「大学卒業から 20 年 中国留学から東京リーマン生活、そして与論島移住へ」

講師 佐藤伸幸氏（与論島エコツアーガイド）

2023 年 12 月 6 日（水）3 限、シオン館 210 教室（オンライン）

今年度は与論島と本学教室をオンラインで結び、同島在住のエコツアーガイド佐藤伸幸氏にご講演いただいた。佐藤氏は文化交流学科の 2004 年の卒業生で、卒業後も現・学科主任の志賀市子先生と交流があり今回の講演の運びとなった。

講演では現役学生に対するキャリア形成アドバイスを交えながら佐藤氏の歩んだ道のが生き生きと語られた。佐藤氏は在学中に交換留学生として中国・天津に 1 年間留学、卒業後は再び中国の大学院に進学した。帰国して東京で企業勤めののち、総務省の地域おこし協力隊員として与論島に赴任、そのまま島に移住して起業にこぎつけた。まさに駆け抜けた 20 年といったところで、いまは与論島でカフェ経営そして得意の語学（英語、中国語）を活かして国内外の観光客を相手としたガイドを行っている。

佐藤氏のお話は「つかみ」のある吉本芸人の紹介（部活仲間、茨キリの卒業生）からはじまって、とにかく面白い。その面白みの源泉はやはり佐藤氏のバイタリティに求められるものだ。「中国」、「東京」、「与論島」と異文化の間を渡り歩きながらご自身の道を切り拓いてこられた佐藤氏は、いま与論島の地域コミュニティに深くコミットしながら、そして同時に国内外のさまざまな文化的ルーツを持つ人々とガイド業を通じて日々交流を続けている。その姿には文化交流学科での学びが深く活かされており、講演会に参加した現役学生たち（当日は教員含めて 90 名ほどが参加）にとっても大きな刺激となったことは間違いない。佐藤氏の当日のご講演内容をつぶさに記すことはかなわないが、「与論島 佐藤伸幸」で検索していただければ多くの情報にアクセスできる。ここではインターネット上の氏の体験談の記事 URL をひとつ挙げておく。

与論町地域おこし協力隊ポータルサイト ヨロンとはたらく仲間たち
「求められることとやりたいことをどうかみ合わせるか：先輩協力隊 佐藤伸幸さん」
<https://yoron-chiikiokoshi.net/senpai-01>

講演後半では与論島の美しい海の風景も紹介され、学生、教員ともに「いつか与論島で文化交流体験を」という思いにさせられた。そう遠くない未来に実現できるに違いない。

以下、講演会参加学生から寄せられた感想をいくつか紹介しておく。文化交流学科の学びが自分自身の将来としっかりつながっていることを佐藤氏の講演を通じて自覚したという感想が目をつけた。中身の濃いご講演をいただいた佐藤さんに、この場を借りて御礼申

上げたい。ありがとうございました。

<学生の感想>

趣味で留まらず、それを通して社会に貢献するということが素敵だと感じたし、私もそんな風になりたいと思えた。与論島に是非行きたい。(C科1年生)

大学で学んだことが将来の仕事の幅が広がることに繋がると思うと、残りの3年間を大事に過ごそうと思った。(C科1年生)

これまで約3年間様々な授業を受講し、多くの知識をつけてきましたが、いまいち何に役に立つのかなどは考えられていませんでした。しかしこれまで受けてきた授業は今後の人生において密に関わりのある授業だったのだと改めて知りました。(C科3年生)

素晴らしい講演をありがとうございました。自分でやりたいと思ったことを積極的に挑戦していく姿勢や、自分がやりたいと思ったことと社会が求めていることの中で自身にできることをし続ける姿勢がすごいなと思いました。私はまだ将来やりたい事が見つかっていないので、佐藤さんのように少しでも興味を持ったことややりたいことを見つけたら恐れずに挑戦してみたいなと思いました。また、今後の人生に関わってくるだろうこの大学生活を有意義に過ごせるようにしたいなと感じることが出来ました。(C科1年生)



オンライン講演会の模様

V. 文化交流学科 FD 報告

2023年度文学部文化交流学科FD報告

文化交流学科主任 志賀 市子

日時：2023年11月21日15時00分～16時30分

場所：茨城キリスト教大学1号館 1201教室

内容：「コロナ後の海外リスクマネジメントセミナー」

情報提供側（実際の講演者は名前の前に◎を付けた）：

◎城戸克斉氏（ジェイアイ傷害火災保険株式会社DX推進部DX推進課リスクソリューションズ担当マネージャー）

◎志賀敦宣氏（ジェイアイ傷害火災保険株式会社東日本サービスセンター、オペレーションサービス課長）

伊藤藤貴氏（ジェイアイ傷害火災保険株式会社東日本サービスセンター、オペレーションサービス課東日本営業チーム）

中澤俊彦氏（JTB水戸支店支店長代理）

宮内優真氏（JTB水戸支店教育営業課）

参加者：文化交流学科の教員12名

今年度は新型コロナウイルス感染症のワクチン普及に伴い、日本も含めた各国で海外渡航制限が緩和され、本学でも学生の海外留学や教員引率による海外研修が再開した。だが、コロナ禍以降の学生の海外研修をとりまく環境は、以前とは様変わりし、海外渡航に伴うリスクも変化してきている。そこで2023年のFDでは、JTB水戸支店とJTB関連会社のジェイアイ傷害火災保険の担当者をお招きし、コロナ後の海外留学、研修のリスクについて講演していただくことにした。

最初の講演は「海外留学のリスクについて」というタイトルで、主として新型コロナウイルス発生前後の保険金請求状況の変化や感染症以外の海外渡航に関わるさまざまなリスクについて報告された。コロナ禍以前の2019年と以後の2021年では、保険金請求に占める治療・救援費用の割合が47.8%から92.1%に上昇しており、渡航後、新型コロナウイルス感染症に感染したことで、治療費、入院費や滞在費がかさむケースが増えている。新型コロナウイルス感染症の感染症法上の扱いが5類に移行しても、流行が収束したわけではなく、またインフルエンザの流行も各地で報告されている。また感染症以外のリスクでは、ヘイトクライムの増加が指摘され、その他従来から見られるスリ、ひったくり、怪我、病気などのリスクや現地で麻薬犯罪や自然災害に巻き込まれるケースが紹介された。

海外留学、研修の事前準備、指導については、従来から指摘されていることではあるが、飲料水や食べ物への注意、テロ対策などの安全対策の他、危機事象発生時の対応についての提言があった。たとえば、X（旧ツイッター）などSNSでの連絡は意図した内容が伝わらな

かったり、あらぬ誤解が生じたりすることがあるため、どこにも連絡がとれない場合の最終手段とすべきであるという指摘もあった。

二つめの講演「海外旅行保険について」では、近年は治療・救援費用が300万円以上に上るような高額な事象事例が増加しており、海外旅行に出かける学生を守るために、海外旅行保険の加入が必須であることを強調していた。JTB傘下のジェイアイ傷害火災保険株式会社では、海外36都市に「Jiデスク」を設置し、海外の提携アシスタント会社が医療アシスタントサービスを提供している。学生がこのサービスを受けるには、所属する教育機関単位でJTBの海外旅行保険に加入することが望ましいとする提言があった。

学生の海外留学や研修はコロナ禍以前からリスクなものであることは指摘されていたにもかかわらず、これまであまり真剣にとりあげられてこなかったのは、たまたまこれまで大きな事故が何もなかったからに過ぎない。だがひとたび何か事故が発生した場合、たとえそれが一人の学生であったとしても、引率教員だけでは対応しきれず、大学全体を巻き込んだ大きなスキャンダルになりかねないことは自明のことである。講演後の質疑応答やディスカッションを通して、海外引率のリスクとその対応に関して教員の意識がより一層高まったことは、本FDの一つの成果と言えよう。

文化交流学科では、来年度韓国での文化交流体験やインドネシアでの日本語教師実習が計画されており、学生の海外研修に伴うリスクと教員がそれいかに対処していくかという問題は喫緊の課題である。今後、本学の学生が海外で医療アシスタントサービスを受けられるようになるには、大学単位で旅行保険会社と契約を結ぶ必要があり、そこに至るには各方面での議論が必須となる。個人的には、本学が提供する海外留学や研修に保護者が安心して子供を託すことができるという点で、検討する価値はあるという感想を持った。

『アクティブ・ラーニング報告書』は、茨城キリスト教大学文学部文化交流学科の出版物です。
Active Learning Report is published by Department of Cross- Cultural Studies, College of Literature,
Ibaraki Christian University.

2023 年度 文化交流学科

アクティブ・ラーニング報告書

2024 年 3 月 1 日発行

©2024, Department of Cross-Cultural Studies, College of Literature, Ibaraki Christian University

発行 茨城キリスト教大学文学部文化交流学科

〒319-1295 茨城県日立市大みか町 6-11-1

電話 0294-52-3215 (代表)

編集 勝山 紘子

表紙デザイン 鴨志田 みあり (文化交流学科2年)

